

大阪市立大学生活科学部紀要・第46巻（1998）

## 弘前藩の蔵屋敷について

植松清志・谷 直樹

On the KURAYASHIKI of Hirosaki Clan, Mutsu Country (Oshu)

KIYOSHI UEMATSU and NAOKI TANI

## 1 はじめに

大名屋敷とは、江戸時代に参勤在府する諸大名のために、幕府が与えた屋敷で<sup>\*1</sup>、藩邸とも称した<sup>\*2</sup>。この屋敷には、藩主の在府時の正式の住まいであり、藩の江戸役所でもある上屋敷<sup>\*3</sup>と、別邸といえる中・下屋敷があった。中屋敷には隠居後の藩主などが住んだが、上屋敷に比べて面積に余裕があったため、藩主の日常的な居住機能も備わるようになった<sup>\*3</sup>。下屋敷には、別荘用として郊外に設けられたものと、年貢米を貯蔵するための蔵屋敷の2種類があった<sup>\*3</sup>。また、各藩は、江戸以外にも京都や大坂、敦賀など、主要な都市や交易地に屋敷（蔵屋敷）を設けている<sup>\*4</sup>。

諸大名は、参勤交代による定期的な移動や、江戸での生活のために莫大な出費を迫られ、その財源確保のために江戸や大坂などに蔵屋敷を設けて、米穀や特産物の積極的な販売活動を行った。大坂における蔵屋敷の数は、元禄16年（1703）に95<sup>\*5</sup>であったが、天保期には120と増加し<sup>\*6</sup>、「天下の台所」<sup>\*7</sup>として全国の経済に大きな影響を及ぼし、また蔵屋敷の建築群は独特な都市景観を構成していた。

大名屋敷の建築的な研究は、各藩の江戸藩邸を中心に多くの蓄積がある<sup>\*8</sup>。蔵屋敷の研究は、主に経済史や商業史分野において蓄積される<sup>\*9</sup>一方で、考古学や村方文書の分析による研究も成果を上げているが<sup>\*10</sup>、その建築や居住機能などに関する研究は少なく<sup>\*11</sup>、多くの研究の余地を残している。また、これまでの蔵屋敷の研究は西国諸藩のものが主で、東国諸藩の研究は少ない<sup>\*12</sup>。

筆者たちは、近世大坂とその周辺地域における武家住宅の研究に取り組んでおり、その成果として狭山藩における陣屋の都市計画と武家住宅の実態を解明した<sup>\*13</sup>。一方で、大坂における武家住宅として、大阪城周辺に存在

した城代や御定番などの幕府関係の武家住宅、各藩が設けた蔵屋敷、周辺の小城下町・陣屋における武家住宅の研究を行うとともに、新史料の発掘・調査を行っている。

今回、東国諸藩の一つとして弘前藩を取り上げる。主に弘前市立図書館所蔵の「津軽家文書」を用いて、同藩の江戸以外の5ヶ所の蔵屋敷を紹介し、比較・検討を行いつつ、大坂蔵屋敷の成立と変遷をとらえ、その特質を論じたい。

## 2 弘前藩

弘前藩は、藩庁を陸奥国弘前に設けた藩で、津軽藩ともいう。城持ちの外様大名である藩主津軽氏は、初代の為信から12代の承昭にいたる約300年間当地に定住した<sup>\*14</sup>。弘前藩の石高は、表高10万石に対し、内高は約33万石であり、豊作時には実高60万石を越えたが、寛文9年（1669）～安政6年（1859）にわたる蝦夷地への出兵と凶作が藩財政を窮乏化させた<sup>\*15</sup>。そのため、同藩は、毎年多額の借金をした。宝永5年（1708）に、5代藩主津軽土佐守信寿が、江戸の米屋三右衛門を証人として借りた1,700両の利息は、100両につき1ヶ月に金1両2歩と銀10匁であったという<sup>\*16</sup>。

同藩は、江戸や京都などでの生活、領内における非自給物資（高級衣料品や武具など）の購入、さらには藩内の円滑な経済活動などのために、江戸のほか、板久、敦賀、大津、京都、大坂などに蔵屋敷を設け、年貢米などの廻漕や販売を行い、積極的に経済活動に関わっている。これらの蔵屋敷の様子は、享保7年（1722）の「御屋鋪之図」<sup>\*17</sup>により窺うことができる。これ以前の屋敷は、すでに文禄2年（1593）に京都・駿河・大坂・敦賀に設けられ、留守居を置き、毎年津軽から交代で勤務をしているが、史料上の制約から詳細は不明である<sup>\*18</sup>。

### 3 各地の屋敷

前述の「御屋舗之図」をもとに、各地の蔵屋敷の様子を窺うことにしたい。

#### 1) 板久屋敷

板久は現在の茨城県行方郡潮来町である。当地は、東北諸藩の江戸への物資輸送の中継地として繁栄し、津軽藩のほかには仙台藩などの蔵屋敷も設けられていたが、享保期（1716～35）頃から前川が埋まるとともに、利根川の銚子河口から直接江戸入りする船も増加し、港町としての機能が次第に失われた<sup>\*19</sup>。

図-1の裏面には、「板久御屋敷之図会所版より出、此通写置候様大石庄司殿被仰付、則本紙会所江御返シ被成候 享保七壬寅年八月廿一日」との付箋があり、筆写されたことが分かる。敷地は、南東面が川筋に面して長さが38間、東北面が14間4尺、北西面が39間、西南面が18間の台形で、面積は約638坪である。川筋以外はすべて町通りに面しているが、東北面は竹藪・竹垣、西南面は堀とともに出入口はなく、「冠御門」のある北西面が正面と考えられる。川筋には2ヶ所の木戸口があり、堀や低い生け垣が設けられている。敷地の西南部に「御番所」（2間×4.5間）と「御長屋」（2.5間×9間、惣廻り3尺の下屋）があるが、蔵はみられない。このように、蔵屋敷とはいえ蔵がないことから、中継地としての最低

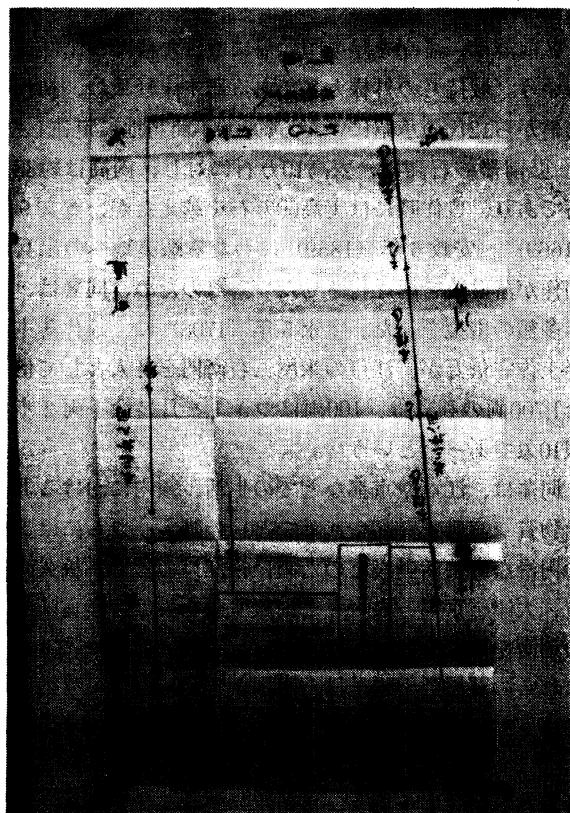


図-1 板久屋敷図

限の居住機能のみを有していたと考えられる。

当屋敷は、天明元年（1781）に、通船がないこと、廻米が銚子廻りになったことを理由に家来の寺嶋三郎兵衛へ永預けとなり整理された<sup>\*12</sup>。

#### 2) 敦賀屋敷

敦賀は古くから、畿内と北陸・北国を結ぶ要所として栄えてきたが、寛永11年（1634）酒井氏の領知以来、畿内・近江はもとより、美濃・伊勢などと北陸・奥羽、さらには蝦夷地を結ぶ拠点として、小浜とともにその重要性を増した。敦賀湊が最盛期を迎えた承応から寛文初期（17世紀中期）の入津米俵数は、60～70万俵であったという<sup>\*20</sup>。これらの物資は、敦賀から山中もしくは新道野経由で海津や塩津へ陸送され、大津や長浜・米原方面へ運ばれた。なかでも大津は、敦賀や小浜からの主要な物資の集荷地<sup>\*21</sup>として繁栄した。

弘前藩は敦賀・大津に蔵屋敷を設け、寛文から延宝期（17世紀後期）にかけてすべての城米を敦賀へ送り、同地や大津で販売している<sup>\*21</sup>。敦賀・大津という販売経路の重要性は、背後に大都市京都や港町伏見を控えていることにあったのである。そのため、敦賀・大津・京都の蔵屋敷役人は同時に任命されることが多く、特に京都蔵屋敷は敦賀の上位機関として位置づけられ、敦賀役人もその影響下にあった<sup>\*12</sup>。また、秋田藩でも慶長末年から寛永にかけて1万石の蔵米を敦賀に廻送し、敦賀や大津で販売している<sup>\*21</sup>。しかし、寛文12年河村瑞賢により西廻航路が開発・整備されたのを機に、津軽藩では延宝6年（1678）に大坂への廻米を本格化し、貞享4年（1687）からはすべてを大坂へ送るようになった。これらの事情から、敦賀湊への入津量は享保期には激減し、敦賀は急速に衰微した<sup>\*22</sup>。

弘前藩の敦賀屋敷は、上方での勤番や関ヶ原戦などの軍役のために設置されたもので、当初は軍事的な性格が経済的性格を上回っていた<sup>\*12</sup>。敦賀における大名屋敷は津軽家のみで、他国の者には屋敷地を売買しない決まりであったことから、同藩が領主酒井氏より特別の配慮を受けていたことがわかる<sup>\*12</sup>。屋敷は、船町通りをはさんで、東浜町と船町に分かれており（図-2）、小路（辻子浜通り）を隔てた東側と船町通りをはさんだ北東部に町屋があり、西側は豪商打它（うた）家に隣接していた。敷地は、拝領地か買得地か不明であるが、春秋二季には地子銀を納め<sup>\*12</sup>、祭礼時の米1石2斗のほか、「七夕歳末之為御祝儀」を出しているが、これら以外は「…掛物一向ニ御屋敷江ハ相掛り不申…格別之御屋舗」であった<sup>\*23</sup>。

東浜町の屋敷は津軽屋敷といい、敷地規模は、表地口

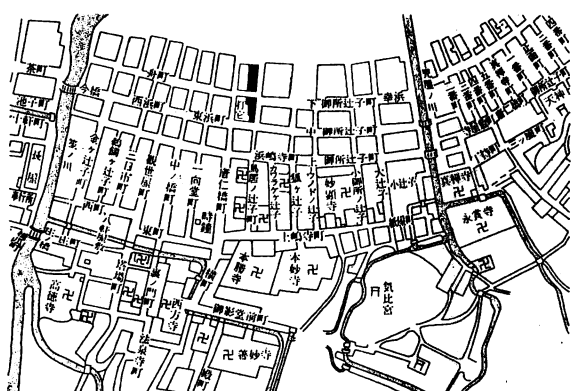


図-2 敦賀屋敷の位置（黒塗り部）  
（『敦賀市史通史編』上巻の図に加筆）

5間3尺、裏地口12間1尺、奥行35間1寸5分で総坪数305坪である。船町の屋敷は浜屋敷といい、敷地規模は、表地口12間1尺、裏地口12間1尺、奥行31間半で総坪数約386坪、両者の合計約681坪であった<sup>\*24</sup>。その昔に建てられた屋敷には、「御殿御座之間杯も有之、結構之御邸」<sup>\*18</sup>であったが、寛文5年7月に敦賀表唐仁橋から出火し、屋敷は残らず焼失したため、同10年までに「唯今之御屋鋪御蔵屋鋪二御建」られた<sup>\*23</sup>。弘前藩では、公儀からの巡見があるごとに「見苦敷無之様ニ御修覆被仰付」るなど、維持管理に配慮している<sup>\*23</sup>。

天明期頃には「当時者同所へ廻米不仕数年来無用ニ御

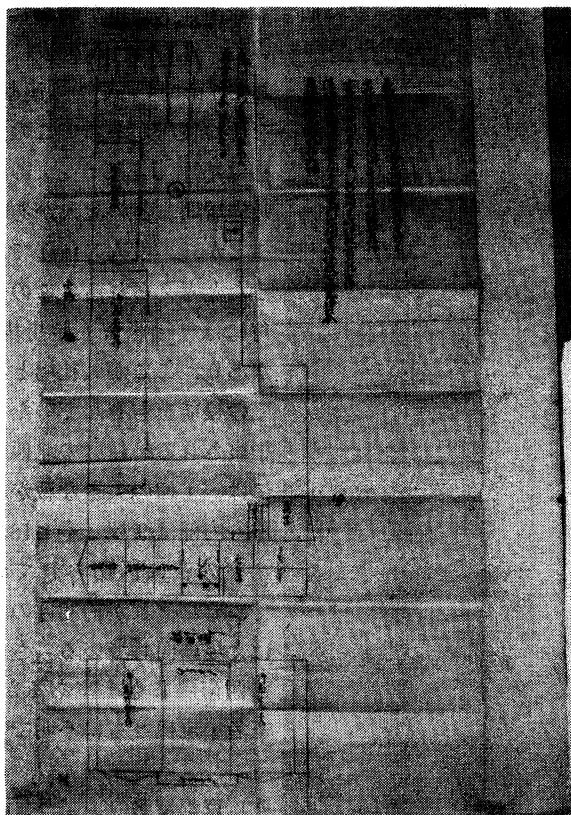


図-3 敦賀屋敷図（享保図）

座候」という状況となり、蔵屋敷が機能しなくなったので、天明2年に「右建家・蔵・地面共田丸次郎左衛門へ譲り遣し」<sup>\*24</sup>ている。諸役は同人から差し出す約束で、「式人扶持」が差し遣わされ、「津軽屋敷」の名称はそのまま使うように言っているが、譲り渡した上は「当人存意次第」<sup>\*24</sup>としている。また、名称だけでなく、「私屋敷ニ相成候事ハ内分之義…当地町役人中江も不申…外江も不沙汰」<sup>\*24</sup>と譲渡を公にしないようにしている。地子銀は、「浜屋鋪分一口無地子」であるが、他人に譲る際

には地子銀を付けるという条件であった<sup>\*24</sup>。以後田丸氏は、廃藩時まで同屋敷を管理する。

屋敷内の建物の配置や変遷を図-3（享保7年：享保図とする）、図-4（天明元年：天明図とする）、図-5（嘉永6年：嘉永図とする<sup>\*25</sup>）をもとに、比較・検討をしてみよう。

敷地の規模は3者ともほぼ同じで大きな変化はない。津軽屋敷内の建物の配置を見ると、天明図に見える西側中央部と西北よりの2ヶ所の蔵跡は、享保図においても蔵がなく、享保7年の時点ですでに失われているのが分かる。また嘉永図でも前者の場所には蔵はなく、後者には「ユトノアト」とあり、その西側には井戸付きの土間が描かれていることから、ここには土間と湯殿が設けられていたが、湯殿が取り壊されたと推察される。享保図では、東側中央部南よりに「物置」（17坪半）、北側中央部「御門」の東側に住居（座敷6坪、次間4坪半、土間4坪半）があるが、天明図ではともに見られない。嘉永図では、享保図の「物置」の場所に「土蔵」が3棟（1

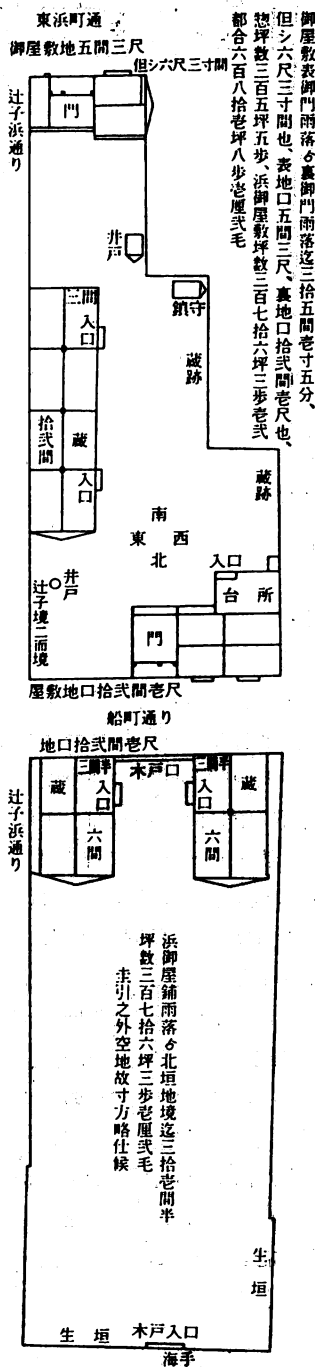


図-4 敦賀屋敷図（天明図）  
（『敦賀市史通史編』上巻による）

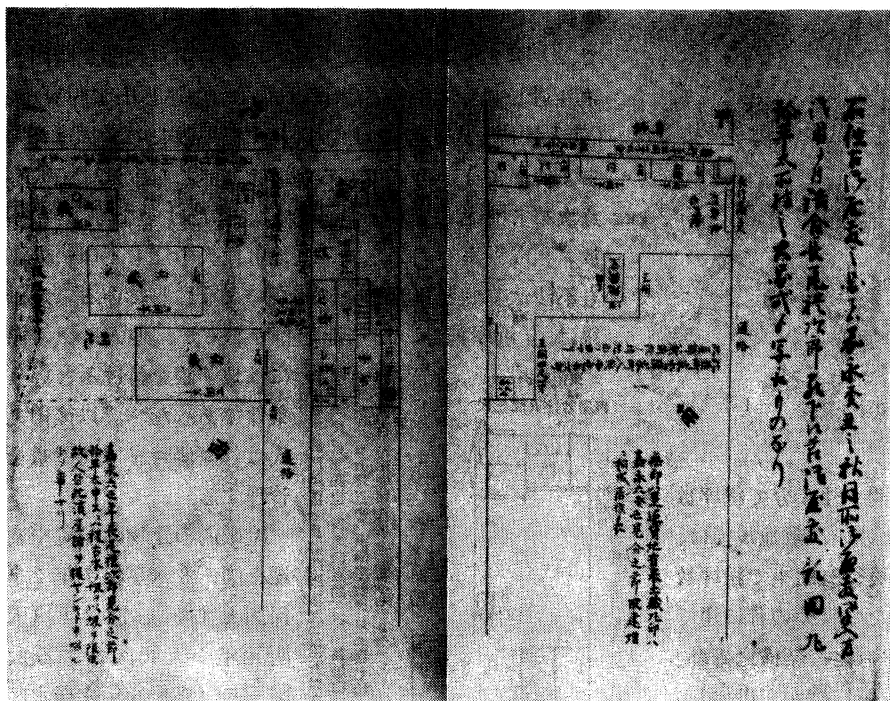


図-5 敦賀屋敷図 (享保図)

棟2間×3.5間=7坪)設けられ、また北東隅部の住居は土蔵になっている。さらに享保図では、南側中央部「御門」の南に隣接して「御屋敷守居所」(2室、台所)があるが、天明図では台所部分がなく、嘉永図では住居全体が見られない。

浜屋敷内の配置は、享保図・天明図ともに2棟の蔵の間に空き地を設けている。ただし、前者では船町通りとその反対側に「ひらきす戸」\*26が設けられている。後者では、通りに面して「木戸口」となり、反対側に戸はない。2棟の蔵の規模は、享保・天明図ともに21坪で変わりはないが、嘉永図では東北部(24坪)、中央部(19.5坪)、西南隅(22.5坪)と、棟数・規模ともに増加し、配置も雁行状に変化している。位置に変化がないのは、西南隅の蔵だけである。蔵の増築は、津軽屋敷東北隅の蔵\*27と、浜屋敷の北東隅の蔵(4間×6間=24坪)が嘉永6年に建てられていることから、享保～嘉永年間に至る間に居住部分が減少し、蔵部分が増えたことが窺える。すなわち、蔵屋敷を田丸氏に譲ったことで、常駐の役人が不要になり、そのため住居としての機能が低下した。また、敦賀廻米が全く無くなった訳ではなく、少量ながらも継続していること、さらに幕末には津軽藩も廻米を行っていることから\*12、居住機能よりも保管機能が優先的に維持されたと考えられる。

### 3) 大津屋敷

幕府をはじめ諸藩の蔵屋敷が大津に設けられたことで、次第にその機構が整備された。その数は、幕府・諸

藩・諸旗本などの蔵屋敷36、また元禄期に売り間屋24、買い間屋22、正徳・享保期には両者の合計が74もあった\*28。

加賀藩では、敦賀三日市町に蔵屋敷を設けていたが\*29、元和元年(1615)11月、大津に御米奉行を置き、蔵米を毎年大津と敦賀へ1/3ずつ送り、売り捌きには「大津之相場中之並」\*21を基準とするように指示するほど、大津の重要性を認識していた。

弘前藩は、延宝6年からの大坂廻米の本格化と、それに続く貞享4年よりの上方廻米の大坂への集中により、大津への廻米量を減少させた\*12。そして、天明元年10月には当地への廻米が無い状態となったため、蔵屋敷は沢村藤兵衛へ

永預けとなり、事実上大津蔵屋敷は閉鎖された\*12。同屋敷は堅田町に設けられ、北面を琵琶湖に接している。図-6によると、敷地面積は約392坪、町通り表約8間2尺、東は町屋に隣接し、裏行約40間3尺、西は小路に面し、裏行50間で、湖に面する北面には石垣が築かれて

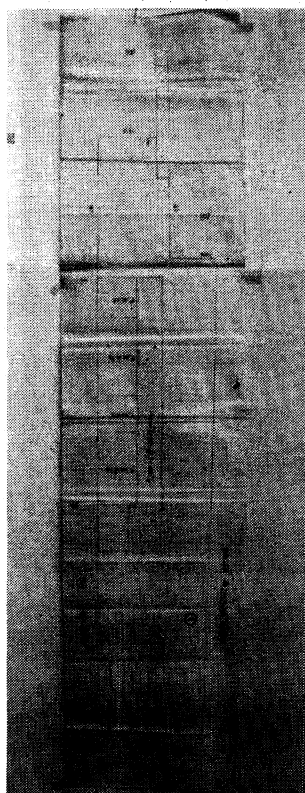


図-6 大津屋敷図

いる。建物は、南の表に面して「御門」「式台」「座敷」をもつ住居がある。この名称は不明であるが、「御屋敷守居所」との記入があることから、役人の住居であったと考えられる。この一角には「御米買人腰掛場」があり、ここが入札場としての機能をも有していたと推察される。住居の北西側には、1棟の大きな蔵がある。内部は9坪2室と18坪2室の蔵に区切られていて、それぞれが約33坪の米はえ場に面している。さらに西南隅にも1室あるが、室名・規模ともに不明である。

### 4) 京都屋敷

江戸時代初期の京都は、

金融市場としては大坂よりもはるかに先進性をもっていたが、元禄期（1688～1704）をピークとして金融都市としての機能は大坂に移行した<sup>\*7</sup>。例えば、広島藩京都屋敷では、物品の購入が主で、蔵物の払下げや払い米をしないから収入はなく、そのため京都屋敷の入用は京小払銀として、しばしば大坂蔵屋敷の経費に計上されている<sup>\*20</sup>ことから、消費が中心の京都屋敷の性格を窺うことができる。また、京都屋敷の主要な任務を、京都所司代などへの付届けや方々への使者の派遣、京都の町人からの借銀の調達などとしながらも、「京都蔵屋敷は、大坂蔵屋敷の出先機関」と位置づける山本博文氏の指摘は、京都屋敷と大坂屋敷の地位の逆転をよくとらえている<sup>\*30</sup>。

弘前藩の京都屋敷は、釜座通姉小路上ル津軽町西北角に位置する。津軽町の由来は古く、すでに寛永14年（1665）の洛中絵図に見られる<sup>\*31</sup>が、もとは神明横大路町といい、津軽家に拝領になり町名を改めた<sup>\*18</sup>。

敷地は、表口22間3尺7寸5歩、北隣は井筒屋伝兵衛、裏行14間6尺、西境姉小路通溝限りで、「津軽町表通り三軒役、北神明町通二軒役」を負担している<sup>\*18</sup>。同屋敷は宝永5年に「御類焼」<sup>\*18</sup>しているが、被災の規模は不明である<sup>\*32</sup>。

同屋敷では、初代藩主津軽為信が、孟蘭盆会に都鄙の人に見物させる目的で2間4方の燈籠を出したところ、「津軽の大燈籠」と有名になったが、享保年中に「贅なり」の理由で中止された<sup>\*18</sup>。為信の没年が1607年<sup>\*33</sup>であるから、100年以上続いたことになる。明和4年（1767）には、洛中洛外屋敷沽券状改めがあり、拝領屋敷か、買得の屋敷かで町内と争論がおきている<sup>\*18</sup>。津軽屋敷が町役を負担してきたことがその原因で、拝領屋敷ならば町役の負担は無いはずというのが町内側の主張であった。火事で記録などを失い反論に苦勞しているが、津軽側は、買得の屋敷ならば、町人の名前で買うことになるから、津軽町と唱えることはできないだろうと一貫して主張している。結局、拝領屋敷ということで決着したが、町役はこれまで通りとなっている。敦賀屋敷でも町役の負担はあったが、いかに大名の屋敷といえども、町内との関係を抜きには生活できないことが窺える興味深い事件である。

京都屋敷図は、図-7・8の2枚が同一の袋に納められていた。双方の所在地はともに東を釜座通りに、南を姉小路に面している。両図によると、東の間口は22間3尺7寸5分で、釜座通りに面してともに「表御門」を設け、南は14間6尺でともに「裏御門」を設けている。西は図-7では未記入であるが、図-8では23間5寸、北は図-7では14間2尺2寸5分、図-8では13間余2尺

とあり、約1間の差があり、総坪数においては前者が「凡三百三拾五坪」、後者が「三百拾五坪六歩余」で、後者が約19坪狭くなっている。両図面は、双方の建物配置が全く異なることから、別年代のものと考えられる。そこで、天保年間の写しである図-9（天保図とする）を加えて、3者を比較してみると、図-8と天保図にお

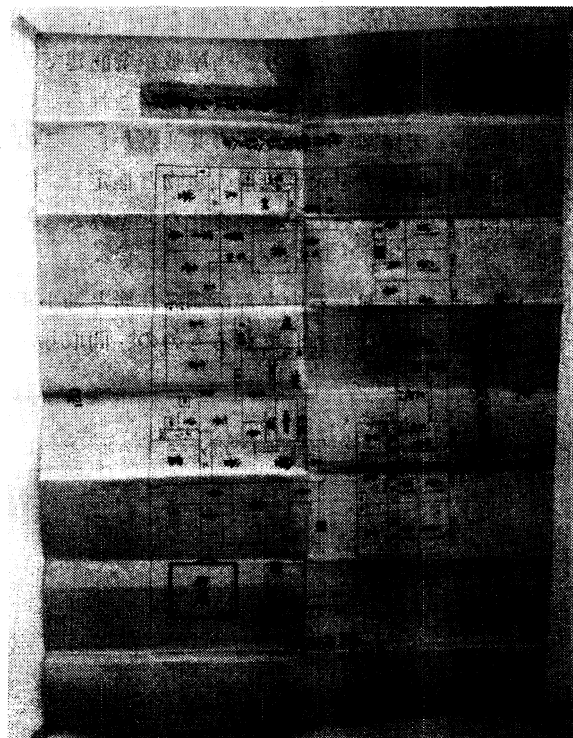


図-7 京都屋敷図（焼失前）

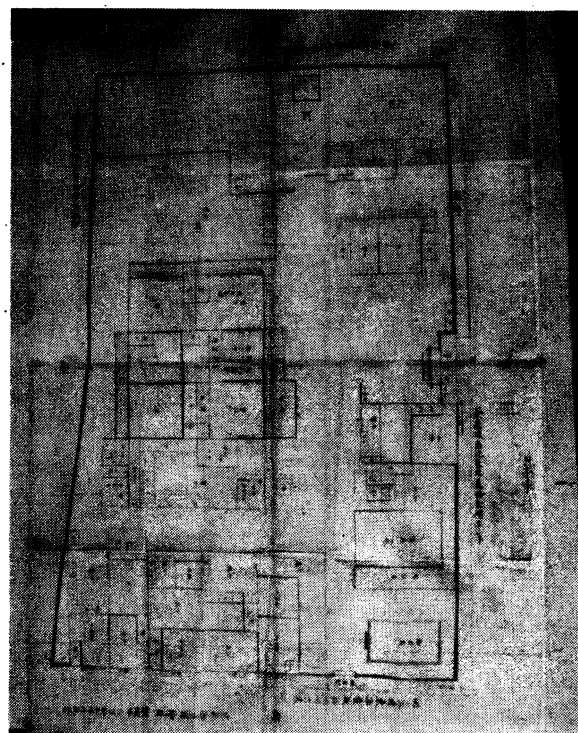


図-8 京都屋敷図（焼失後）



いて「表御門」、「裏御門」、東南隅の土蔵、中央部西側の住居、姉小路に面する住居などの配置が共通している。図-7は、南西の隅に土蔵があり、前2者とは異なる配置となるとともに、「表御門」をはさんで、格子付きの窓がある住居が連続して設けられている。敷地の規模がほぼ同一なのに建物配置が大きく異なるのは、何らかの理由で建て替えられたとしか考えられない。そこで、既述の宝永5年の「類焼」により、当屋敷が全面建て替えをしなければならない被害を受けたと推察される。ここでは、図-8・天保図の建物配置の共通点から、この2者を火災以降、図-7を火災以前の建物と推定し、図-8・天保図について、その配置の変化などをみることにしたい。

図-8・天保図における中央部西側の住居と姉小路に面する住居は、位置は共通しているものの、間取りが異

なっている。天保図のほうが、全体的に間取りが小さく小室が増加している。また、図-8では、中央部西側の住居の便所が北側の縁側から離れて独立していたが、天保図では縁が続いて直接入れるようになり、使い勝手が優先されている。相違点は、図-8にみられる「表御門」南側の「物置」や「碓部屋」が、天保図では住居となっている。「表御門」の北側も、前者では独立の2棟の住居であったが、後者では通りに面した住居に変化している。それにともない、北側中央部にあった「八幡稻荷地蔵」が北西隅に移動している。全体にみると図-8より天保図のほうが居住部分が増しており、当屋敷では保管機能より居住機能が重要視されていたことが窺える。

当屋敷は、拝領地であったことから明治になって上邸されるが<sup>\*34</sup>、「室町御邸ハ京都宿限りニ而相済候」<sup>\*24</sup>との記事から、当時津輕藩京都屋敷は、津輕町と室町の2ヶ所にあり、「室町御邸」は上邸されなかったことが分かる。

### 5) 大坂屋敷

大坂に初めて蔵屋敷を設けたのは、天正年代(1573~1592)の加賀前田家で、豊臣秀吉の毎年10万石ずつの回米要求に応えたことによる<sup>\*35</sup>。慶長期(1596~1615)には、諸国の大名が大坂に回米するようになり、大坂の各地に蔵屋敷が設けられた<sup>\*36</sup>。しかし、慶長期の蔵屋敷は、水運が悪い大坂の周辺などに、戦時の陣屋あるいは家臣の常駐所として設けられたもので、登米も兵糧米の性格があり、市中への販売を第一としていないなど、後の蔵物売り払い機関としての蔵屋敷とはその機能が異なっていた。元和期(1615~1624)に入り大坂の市街地整備が進み、堀川の開削が進展するにともない諸藩の蔵屋敷が相次いで設けられた。既述のように、元禄16年には95邸を数え、特に中之島には最も多い40邸が設けられ、堂島に7、天満の堀川の西に18、土佐堀川・江戸堀川の間に14、江戸堀・京町堀の間に6、阿波座堀・道頓堀の間および以南に6、上町台地に4という分布であった<sup>\*5</sup>。

こうして、大坂が西日本諸藩の年貢米市場として成立したのち、17世紀後半の寛文から延宝期にかけて北国諸藩の西廻り海運による大坂廻米が本格化してい

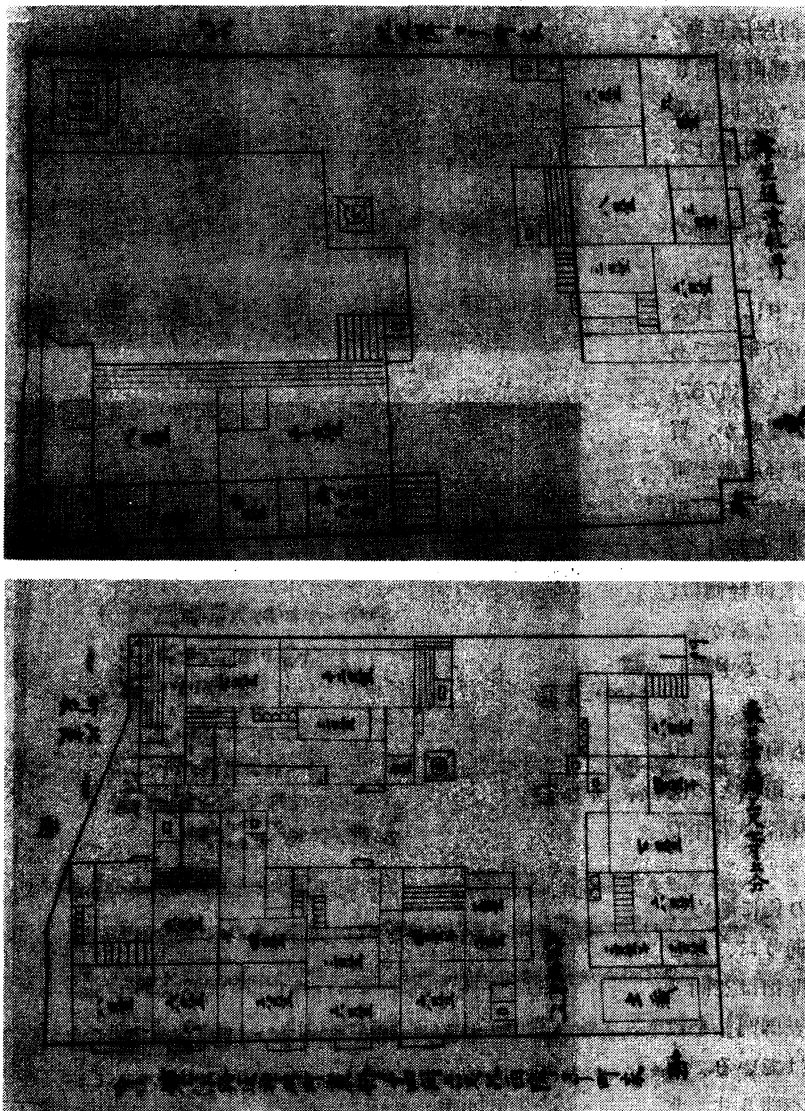


図-9 京都屋敷図(天保前)

く。その大きな理由は、これまでの敦賀－大津経由の廻船経路に対し、積み替えを要さず、運賃が割安というもので、敦賀－大津ルートは大打撃をうけた。これに対し、北国米の流入は、大坂市場に米価の安定をもたらすとともに、西日本市場としての大坂を、全日本市場へと引きあげることになった。さらに、瀬戸内海廻船の日本海への進出が著しくなり、大坂の中央市場としての性格が一層強化された。

津輕藩の大坂蔵屋敷は、天満11丁目にあり（図-10）、敷地は浜地付きで、表口東西19間5尺7寸、裏行南北26間、坪数516坪8合で、2軒役であった。寛政9年（1797）に東隣の鉄屋新左衛門の掛屋敷地（表口8間5尺、裏行25間半、浜地付き、2軒役）を購入し、合計表東西28間4尺2寸、裏行東25間半、西26間、4軒役となり、総坪数は約223坪<sup>\*36</sup>増加して、当初の約1.4倍の約740坪<sup>\*36</sup>となった。

図-11（享保図）と図-12（文政図）によって、屋敷地の拡大される前後の様子を検討してみよう。屋敷の正面は南側で、「表御門」が設けられ、川岸の雁木まで7間5尺であった<sup>\*18</sup>。享保図では「表御門」をはさんで、西側に番所と2

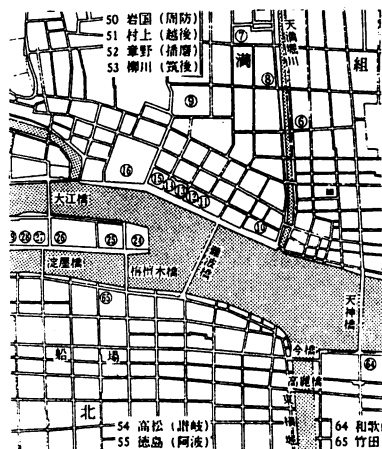


図-10 大坂屋敷の位置⑩  
（『新修大坂市史』第3巻による）  
⑩は佐賀藩、⑪は佐伯藩屋敷

棟の蔵、東側には物置と住居が並んでいる。北側には中央部の「裏御門」をはさんで、西側には番所と住居、東側には役所、溜の間、住居が並ぶ。つまり、表と裏側は、門をはさんで敷地一杯に蔵や住居などが配置されていた。東側には、蔵や井戸、西側には3棟の蔵が敷地境界線に沿って配置されている。さらに、中央部には4棟の蔵と金蔵が設けられ、居住機能よりも保管機能に重点が置かれている。

東側の敷地を購入したときには、「稻荷前之井戸…左右之蔵も酒蔵有来」<sup>\*18</sup>と存在していたが、文政図では稻荷の前の井戸の位置がよく分からない。そこで図-13（天保図）をみると、西南隅の蔵の前に「社」があり、その前に井戸があるから、この井戸を指しているのであろう。また、同図によると、買い足した敷地には、「御金蔵」を含む8棟の蔵が描かれていて、これが左右の蔵や酒蔵に該当すると推察される。こうして、蔵屋敷としての保管機能が充実されたことが分かる。享保図と文政

図の違いは、前者にあった中央部の蔵2棟と金蔵、東側の蔵と東南隅の住居が取り払われ、その跡地には住居や役所などが建てられていることである。また、享保図の「裏御門」の東側にあった役所は、文政図では「交代長屋」に変わっており、「御役所」が屋敷の中央部付近に位置するとともに、居住部分と保管部分のゾーニングがやや明確になっている。

文政11年には、表通りの堀が損傷し見苦しいので、その対策を講じている。方法としては、堀を取り毀し、そこへ既存の蔵を引き移せば、不足分のみの新築で敷地一杯に蔵ができると工夫している<sup>\*37</sup>。天保図によると、そ

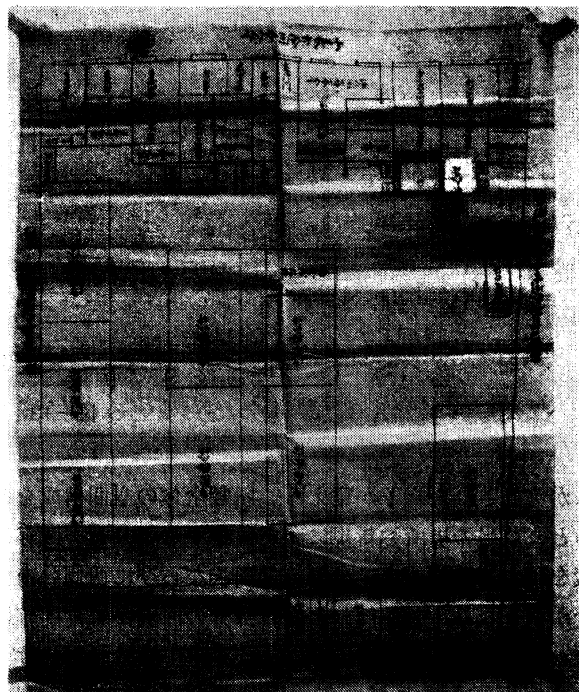


図-11 大坂屋敷図（享保図）

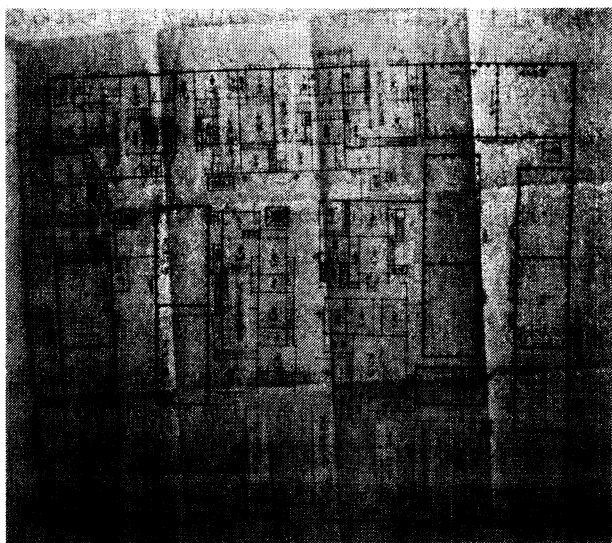


図-12 大坂屋敷図（文政図）

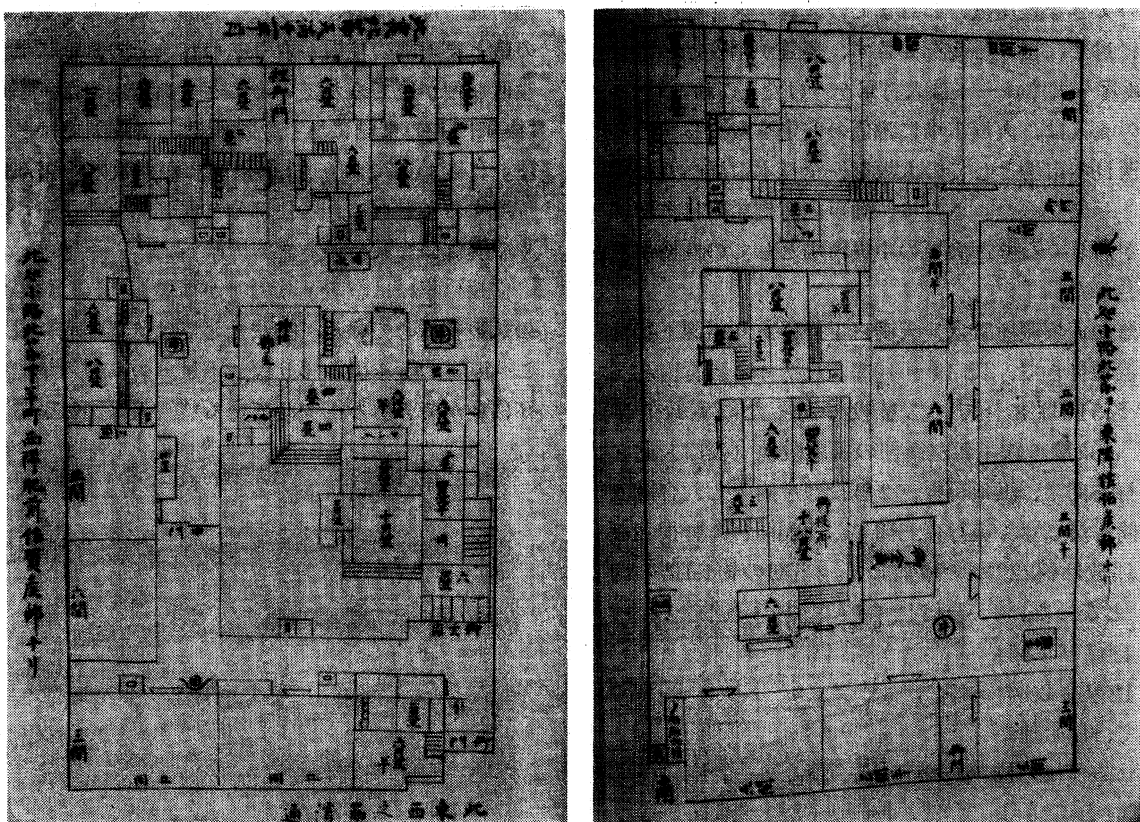


図-13 大坂屋敷図 (天保図)

れが実施された様子が窺える。屋敷全体の空間構成をみると、該当の場所へ新規に蔵を建築するよりも、既存の蔵を移すことで、南・東側の全面、ならびに西側の南半分が蔵となり、居住部分と保管部分の区別がより明確になっている。蔵を移した跡には、「仲仕部屋」が設けられ、庭も拡大されている。居住部分についてみると、「表御門」付近には、「御役所」と関連の諸室が設けられ、「裏御門」付近には常駐役人などの住居が設けられるなど、保管（サービス）、役所（パブリック）、居住（プライベート）の各空間が明確に分離されていることが分かる。これらの整備は、津軽藩の大坂蔵屋敷の重要性を示しているものと考えられる。この蔵屋敷は、明治になって「上邸」され<sup>\*18</sup>、現在この地は天満警察署になっている。

#### 4 まとめ

津軽藩の廻米が、敦賀・大津販売ルートから大坂へと転換したことは、とりもなおさず大坂が全国市場として経済の中心となったことを意味するもので、この点から同藩の蔵屋敷の推移をみると、板久・敦賀・大津屋敷の閉鎖に対し、大坂蔵屋敷は敷地を約1.4倍に拡大し、蔵を増して保管機能を向上させるとともに、役所の拡張、

住居の建て増しなど、公的機能と居住機能をも充実させた。

京都屋敷は、消費を主としながらも、日本の中心にあり、多くの情報を集め、諸方との折衝を行うなど、重要な役目を果たしていたが、それらの経費は大坂蔵屋敷が負担した。そのためにも、大坂蔵屋敷は、経済的な活動とともに、藩役人のための居住機能をも充実する必要があったのである。

本稿では、津軽藩における江戸以外の蔵屋敷の成立や変遷、建築の構成や変化などを中心にみてきたが、特に重要性の高かった敦賀・京都・大坂屋敷の変化などについては、住機能の分析などを中心に、稿を改めて報告したい。

西国大名の蔵屋敷の機能には、経済活動などのほかに参勤交代という要素も考慮されることから、国元と大坂という経済市場を直結する蔵屋敷は、その重要性を益々深めていったと考えられる。今後とも、各藩蔵屋敷の建築構成や機能などの分析・考察を継続する予定である。

本研究において、史料の閲覧などで弘前市立図書館では多くのご配慮を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。



## 注

- \* 1 『日本語大辞典』第6巻（小学館、昭和55年）。
- \* 2 同上第8巻（小学館、昭和55年）
- \* 3 平井聖・波多野純『江戸城Ⅱ』（至文堂、平成8年）
- \* 4 屋敷・蔵屋敷の明確な使い分けはない。例えば、国元では大坂御屋敷と呼称し、地元では蔵屋敷と称する場合が多いが、秋田藩や津山藩では「大坂御蔵屋敷」と称している。以上のことから、各藩では同意に用いていたと考えられるため、本稿においても同意に用いる。
- \* 5 『新修大阪市史』第3巻（新修大阪市史編集委員会、平成元年）
- \* 6 宮本又次『難波大阪』所収「歴史と文化」（講談社、昭和50年）
- \* 7 作道洋太郎「江戸期大坂町人の実力（上）」（『月刊大建協』1988年8月号）によると、天下の台所には、「全国商品の中央市場と言う意味と、天下すなわち幕府所在地の江戸の生活物資供給基地と言う意味」がこめられていた。
- \* 8 北野隆「細川家文書による肥後藩武家屋敷の研究」（『日本建築学会九州支部研究報告』第19号、昭和46年2月）、「近世武家住宅における数寄屋風書院について」（『日本建築学会論文報告集』第263号、昭和53年1月）などの一連の研究、後藤久太郎・平井聖「毛利藩江戸上屋敷指図について（1）」（『日本建築学会関東支部第44回研究報告集』、昭和48年度）をはじめ、「弘前津輕藩江戸藩邸の室内意匠について」（『宮城学院女子大学生生活科学研究所研究報告』第9巻、1975年）、「近世指図の作図技法と図面表現」（『宮城学院女子大学生生活科学研究所研究報告』第23巻、1991年）に至る一連の研究。藤川昌樹「近世初期京都における大名屋敷の成立」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』、昭和63年10月）など。また、近年ではこれらの武家住宅研究の成果をまとめたものとして、『城郭・侍屋敷古図集成』（至文堂）などが出版されている。
- \* 9 佐古慶三「広島蔵と鴻池」（『広島商大論集』第5巻1号、昭和39年10月）、宮本又次「大阪の岡山藩の蔵屋敷史料の紹介」（『大阪の研究』第2巻、清文堂、昭和43年）などの一連の研究、森泰博「府内藩大坂蔵屋敷の業務」（『大阪の歴史』第25号、昭和63年10月）、「鳥取藩大坂蔵屋敷の成立」（『商学論究』第37巻1・2・3・4合併号、1989年10月）、「大坂蔵屋敷の成立」（『大阪経済のダイナミズム』清文堂、平成2年）、「初期の高知藩大坂蔵屋敷」（『経済学論究』第44巻第3号、1990年12月号）などの一連の研究。
- \* 10 「旧佐賀藩大坂蔵屋敷船入遺構調査報告」（大阪市文化財協会、1991年3月）、「広島藩大坂蔵屋敷跡」（大阪市文化財協会、1997年3月）、伊藤純・豆谷浩之「新出広島藩大坂蔵屋敷絵図について」（『大阪の歴史』第51号、1998年5月）、渡辺忠司「大阪三郷町続き在領における蔵屋敷の設置について」（『大阪の歴史』第51号、1998年5月）。
- \* 11 谷直樹・依原敬子「岡山藩大坂蔵屋敷の建築指図について」（『日本建築学会中国支部研究報告集』第16巻、平成3年3月）、谷直樹・伊勢戸佐一郎「佐賀藩大坂蔵屋敷の建築と年中行事」（『大阪の歴史』第25号、昭和63年10月）がある程度である。
- \* 12 印牧信明「津輕藩の敦賀蔵屋敷と廻米制について」（『海史研究』第51号）。なお、同氏は、流通の立場から敦賀蔵屋敷について言及されていて、本研究においても同論文より多くの教示を得た。
- \* 13 拙稿「狭山藩の武家住宅について」（『大阪市立大学生生活科学部紀要』第45巻1997年）
- \* 14 国立史料館編『津輕家御定書』（東京大学出版会、1981年2月）
- \* 15 『国史大辞典』第11巻（吉川弘文館、平成2年）
- \* 16 梅谷文夫『狩谷掖斎』（吉川弘文館、平成6年1月）
- \* 17 弘前市立図書館蔵。同史料は、「享保七壬寅八月廿一日」と表書きのある袋に、京都屋敷図が2枚、板久・敦賀・大津・大坂屋敷図が各1枚と、所在地不明のものが1枚の計7枚が納められている。裏面には「庚申七月改 御日記方」とある。享保7年に作成された図面を、それより以後の「庚申」の年（18年後の元文5年か）に絵図改めが行われたことが推察される。絵図改めが行われた理由（例えば、屋敷の新築・改築や廃棄など）については不明である。所在地不明の屋敷については、袋の表面に「外二何連之御屋敷敷老枚」とあり、改めの際に付されたものと考えられる。
- \* 18 『京阪越藩邸故事図叢 全』（弘前市立図書館蔵）。同史料には、「…駿府之屋敷今者無之」とあり、廃絶されたことが窺える。
- \* 19 『茨城県の地名』（平凡社、1982年）。なお、同書によると、板久は、元禄11年（1698）に水戸藩主徳川光圀によって潮来と改められた。
- \* 20 宮本又次『大阪の研究』第4巻（清文堂、昭和45年）
- \* 21 『敦賀市史通史編』上巻（敦賀市史編集委員会、昭和60年）
- \* 22 『国史大辞典』第9巻（吉川弘文館、昭和63年）
- \* 23 「上 敦賀一件」（弘前市立図書館蔵）
- \* 24 「天明二寅年津輕役人田井友衛与被申候仁より小浜表へ書付ヲ以被届候写」（弘前市立図書館蔵）。合計の数値が合わないが、史料には「式口合坪数六百八拾壹坪八分壹厘貳毛」とある。
- \* 25 前掲18『京阪越藩邸故事図叢 全』所収の同図には、「右往古御屋敷之図者、嘉永癸丑之秋同所御屋敷御手入方御用に付、詰合長尾礼次郎罷下候節、御屋敷預田丸豫平所持之大図式より写取ものなり」とあり、嘉永6年に写されたものであることが分かる。また、同図にはこの図中の○印を付した土蔵（2ヶ所）は同時期に「取建増」たものであると記している。
- \* 26 『建築大辞典第2版』（彰国社、1993年）によると、「す戸」は簀戸と書き、庭園の木戸に用いられる、割竹や細竹を編んだ簡易な戸と、建具の上部を細かい堅連子とし、下部に腰板を張ったものがあるが、前者では簡易すぎるので、後者の形式のものと推察される。
- \* 27 「四間」とのみ記入されていて、規模は不明。
- \* 28 『大津市史』上巻（大津市役所、昭和17年）
- \* 29 『敦賀市史史料編』第1巻（敦賀市史編集委員会、昭和54年）によると、加賀藩の蔵屋敷の設置時期は不明であるが、寛永17年に「敦賀三日市町之内就有之」にあった蔵屋敷を高嶋屋伝右衛門に預けている。
- \* 30 山本博文『参勤交代』（講談社、1998年）
- \* 31 『京都市の地名』（平凡社、1979年）
- \* 32 宝永の大火。宝永5年3月に禁裏をはじめ417町、13、370戸が焼失する大火があった。
- \* 33 『史料館所蔵目録』第12集所収「津輕家文書目録」（史料館 編、昭和41年）
- \* 34 前掲23「上 敦賀一件」に、「元治元子年七月類焼仕未家作二不仕」とあり、これまで継承されてきた屋敷が7月19日の禁門の変の際に焼失したと推察される。
- \* 35 作道洋太郎「江戸期大坂町人の実力（中）」（『月刊大建協』1988年9月号）
- \* 36 表口・裏行から概略計算をした。
- \* 37 「大坂御屋敷御土蔵御取建」（弘前市立図書館蔵）

### On the KURAYASHIKI of the Hirosaki Clan, Mutsu Country (Oshu)

A feudal lord in each domain throughout Japan in the Edo Period built kurayashiki with a warehouse (clan houses) in various parts of the nation. The kurayashiki was used to sell rice collected as land tax special products, thereby supporting the followers'livings in Edo and Kyoto and promoting efficient economic activities.

The Hirosaki clan, Mutsu country had its kurayashiki not only in Edo, but also in Itaku, Tsuruga, Otsu, Kyoto, and Osaka. It forwarded the collected rice to the kurayashiki for the sales purpose. The kurayashiki used for this type of sales has been studied extensively and deeply from a viewpoint of economic history. However, there have been few studies on the architectural aspect of the kurayashiki.

This paper discusses mainly the establishment, continuous changes, architectural composition and variations of the Hirosaki clan's kurayashiki in various locations other than Edo, and elucidates the storange and living functions of the kurayashiki.